

# KOBE 1月号

2015年(平成27年)



City of Design  
KOBE

United Nations  
Educational, Scientific and  
Cultural Organization

Member of the UNESCO  
Creative Cities Network  
since 2008

編集/広報課

☎(078) 322-5013  
FAX (078) 322-6007

## 震災から20年 教訓を未来へ

02-05

Contents

- 02 久元市長の神戸を想う  
「記憶の継承、そして貢献」
- 06・07 新成人インタビュー
- 08 チューリヒ美術館展 ほか
- 09 動物おもしろ小百科 ほか
- 10 軽自動車税の税率を変更します ほか
- 11 広報官の発見 熱血公務員!  
日本全国・世界から、企業を誘致!
- 12 暮らしにプラス
  - この冬も節電に取り組もう ほか
  - 歯ブラシの選び方
  - すまいるネット
- 13-17 市からのお知らせ
- 17 今月のスイーツ店&プレゼント



みなとのもり公園(神戸震災復興記念公園)  
震災から15年目の2010年1月17日に開園  
1月12日(月・祝)に開催される「成人お祝いの会」の企画・運営に携わる新成人代表スタッフの皆さん。6・7面では20歳が描く「夢・未来」を掲載しています。



語り部 NPO法人「神戸の絆2005」岩本 しず子さん

私は戦争を経験したので、就寝時には服や靴などを近くに置いてあります。震災の時も服を着替えて外に出ることができました。災害時には日ごろから備えているものが生きてきます。助け合いもそうです。普段から自分も人も大切にできる人が、いざというときに助け合えるのだと思います。震災から20年、経験した人が少なくなっていく中、経験を語り、命の尊さ、備えの大切さを伝えていきたいです。

減災 ～命を守るために

阪神・淡路大震災で亡くなった方のうち、約80%は住宅の倒壊が原因でした。また、いつ起こるか分からない地震に備えて、自身の、そして大切な家族の命を守るため、住まいの耐震化を進めましょう。

市が行っている住まいの耐震化のためのサポート

- (1) 家具固定の補助...最大1万円。65歳以上の入居者、障害のある人、小学生以下の子どもが住む世帯が対象
(2) 家具固定専門員の派遣...地域で5戸以上まとまって申し込み。(1)の対象世帯は2家具まで無料
(3) 無料耐震診断
(4) 設計費・工事費の補助
(3)(4)は昭和56年5月31日以前に着工した住宅が対象
※申請方法など詳細はすまいるネットへお問い合わせください

講演会「やってみようすまいるの中の安全対策」無料
日時 1月22日(木) 14:00~ 場所 国際会議場 401号室
申し込み はがきか電話かFAXか電子メール
聴いて学ぶ 震災20年ラジオイベント
緊急時の情報収集に欠かせないラジオ。関西のラジオ局のキャスターによる阪神・淡路大震災に関するトークセッションを行います。耐震化や減災に関する情報を発信します。ラジオ本体と電池の状態も確認しておきましょう
日時 1月16日(金) 18:30~、ラジオ関西
1月17日(土) 17:00~、ラジオ大阪

すまいるネット(☎222-0186、☎222-0106)
耐震化促進室(☎322-6608、☎322-6094)



下水道河川部保全課 木下 裕介
持って成長していきたくです。

被災地では、震災から復旧した神戸への期待が大きさを感ずる。その一員としての自覚を。
福島県で下水道の復旧を支援して
被災地では、震災から復旧した神戸への期待が大きさを感ずる。その一員としての自覚を。
福島県で下水道の復旧を支援して
被災地では、震災から復旧した神戸への期待が大きさを感ずる。その一員としての自覚を。

少し落ち着いたのは、深夜0~1時ごろ。一人で多くの人が入れるよう、ベッドを撤去していった救急外来の床に、みんなで輪になり体育座り、緊急のラジオを聴きながら過ごしました。少しでも寝た方がよいと思いましたが、余震も続いており眠れませんでした。外に出ると町は静まりかえっていましたが、東の方にはまだ燃えているところが見えました。



住吉中学校校長 中溝 茂雄

震災当時は鷹取中学校の教員でした。学校が心配で、車で家を出ましたが、途中から渋滞で全く動かなくなり、邪魔にならないところに車を停めて徒歩で学校を目指しました。校区に入った辺りから、たくさんの方が倒壊してお

避難所 大勢の人が生きていけるのか。水も電気もない学校

想像を絶する災害の前に、目の前の負傷者の対応で必死でした。今でも、振り返ると一人一人に十分な対応ができていたのだろうか、痛みを我慢していた人はいなかったのだろうか、と医療に携わる者として自問自答することがあります。
り、知っている人に呼び止められて、救出の手伝いも行いました。
学校に着くと、避難する人が集まってきた。その日のうちに2000人以上の方が来られました。まず体育館、次に会議室へ、次から次へと部屋を空けて入ってもらいました。水が使えず、昼すぎにはトイレが詰まり使えなくなり、ケツの水をトイレの前に置いた。プールの水をトイレの前に置いた。ケツの水を流してももうようになり、生にも手伝って
もらい何時間もトイレの掃除
除をしました。
電気・ガスも止まっています。
街灯も消えた。
後5時を過ぎると真暗な世界でした。懐中電灯で救急医療チームの手元を照らしたり、ご遺体を運んだりもしました。避難所には50体くらいのご遺体が運



人であふれる学校体育館(中央区)

び込まれました。二度にこんな人が亡くなる場面に出会ったのは生まれて初めてのこと、足が震えました。水も電気もない中で、これだけ大勢の人が生きていけるのだろうか不安でしたが、何とかして避難してきた人の衣食住を確保しなければならぬという思いでした。
地震前の1月13日に三年生の理科の授業で地震の話をしました。その中で地震は起こり得ることだと説明はしましたが、17日にこんなことになるとは思いませんでした。授業では命の大切さ、命を守らなければということまで伝えられていなかったことが今も心残りです。
水が出ない、電気が止まっている、普段であればできるはずの対応ができません。守りたい、助けたいという思いが悲しみや悔しさに変わっていく。
人知を超えた自然の力は、多くの犠牲をもたらした。さらに、助かった人たちが助けようとした人たちの心にも消えることのない大きな傷を残しました。

感謝を込めて



阪神・淡路大震災では国内外から多くの支援を受けた神戸。震災後5カ月でボランティアの数は延べ12万人を超え「ボランティア元年」といわれました。
被災地に職員を派遣
市は、世界中からいただいた支援に感謝の気持ちをもち、国内外で発生した自然災害に対して職員の派遣などを積極的に進めています。平成23年3月11日に発生した東日本大震災の被災地には、これまでに延べ1874人の職員を派遣。今も土木、建築などの専門知識を持った職員14人が現地でも復興支援に従事しています。派遣にあたっては、



がれきの撤去



給水活動

阪神・淡路大震災を経験した職員と、経験していない職員がペアで活動し、災害時の経験や対応ノウハウを伝えるなどの取り組みも行っています。

阪神・淡路大震災の概要

地震の概要
発生日時 1995年(平成7年) 1月17日 午前5時46分
震源 淡路島(北緯34°36'、東経135°02')
震源深さ 16km
規模 マグニチュード7.3
程度 6(一部地域で7)

人的被害
死亡者 4,571人(うち約7割が家屋倒壊による)
行方不明者 2人
負傷者 14,678人
負傷者数 599カ所、236,899人(ピーク時)
避難

建築物
全壊 67,421棟
半壊 55,145棟

火事
火災 175件
全焼 6,965棟
半焼 80棟
部分焼 270棟
ぼや 71棟
延べ焼損面積 819,108㎡
※人的被害・建築物・火事は神戸市内



震災直後の西市民病院

停電し、明かりは非常電源の豆球のみになりました。室内が暗くて処置ができません。朝日が入ると、救急の処置を始めてしばらくすると

就寝中、突然の大きな衝撃で目が覚めました。激しい揺れが収まって、窓の外を見ると市街地に4~5本の黒煙が見えました。家族に避難所に行くように伝え、すぐに原付に乗って出勤しました。

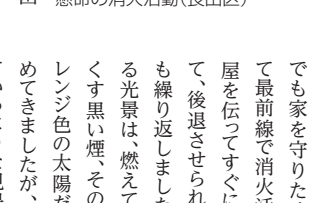


消防局警防課 濱田 宗徳

消防 周囲を取り囲む炎、空を覆った黒煙。経験したことのない火災

川をせき止めた後、まだ消火活動に着手できていない現場に向かいました。後で知ったのですが、火災件数は震災発生直後の15分間で54件でした。これは

長田署に到着し、すぐにも水を掛けたいと思い、署の前の消火栓を開けました。水が流れません。水を確保するため、署の横を流れる新湊川をせき止めるために、新湊川は底と両側面がコンクリート張りなので、下に降りるにははしごが必要で、重さ20kgの土のうを降ろしていく作業は困難を極めました。



懸命の消火活動(長田区)

年間に発生している火災の約8%に相当します。本来であれば、部隊を組んで出勤しますが、火災の数が多過ぎて人手が足りず、4人で消火に向かいました。軒下も家を守りたくて、路地の中に入って、後退させられるという状況を何度も繰り返しました。消火活動中に見え

る光景は、燃えている炎と空を覆い尽くす黒い煙、その中から時折のぞくオレンジ色の太陽だけでした。30年間務めてきましたが、周囲360度が全て燃えているような現場は経験したことがありません。歯が立たず、太い道路のところで延焼を阻止するということになりました。
全ての人を助けたかったし、全ての火

病院 院内に入りきららないほどの被災者。止まった電気、時間とともに増えていく犠牲者



西市民病院 看護師 山下 美香

震災発生時は寮にいました。周囲の建物が倒壊しているのを見て、まずは病院に行かなければと考え、歩いて病院に向かいました。普段通っている道は、倒壊した家屋の残骸でふさがれ、広い道に迂回して病院に向かいました。病院に着くと、すでにたくさんの市民の方が来ており、自分たちが院内に入ることさえも難しいほどでした。
救急の処置を始めてしばらくすると

まちを襲った未曾有の大地震、そのときどんなことが起きていたのでしょうか。最前線で勤務していた職員に話を聞きました。

1995年1月17日5時46分 夜明け前のまちに、走った激震

1995年1月17日、いつもと変わらない朝を迎えるはずだったまちは、20秒にも満たない揺れにより、その姿を大きく変えてしまいました。多くの人の命を奪い、住まいを、仕事を奪い、生活基盤に甚大な被害を与えたのです。

神戸を想う



久元市長の
記憶の継承、そして貢献
あの震災から二十一年の歳月が流れて、あの震災への対応と、後の復興に苦勞された皆様、ありがとうございます。
退かれ、新しい世代を迎えよう。
私たちが、月日が経つのを止めることはできませんが、記憶を留め、受け継ぐ、いくつとでも繰り返す。震災の経験と、そこから得られた教訓を、次の世代に引き継ぐこと、これが、まず、このことは、震災二十一年の、今と、共有する神戸市民に課せられた、厳粛な責務ではないでしょうか。
神戸の街は、国内外から寄せられ、大沢のみなさん、のちのち、後継り、おかげで復興すること、おかげで、私たちが、感謝の気持ちと、心れること、なく、自らの経験を活かし、防災減災、安全、健康などの分野、他の都市、や地域に貢献して、いきたいと思います。
まず、貢献し続ける、都市であり、と、に、みんな、誇りを持って、お出、来る、都市、でありたい、と、思、います。
神戸市長 久元 喜造